

大洲大作 未完の螺旋

主催 art-Link 上野一谷中実行委員会
日時 令和元年8月10日(土)～8月18日(日)
会場 京成電鉄 旧博物館動物園駅(台東区上野公園)

この企画では、上野公園内の旧博物館動物園駅を会場に、列車の車窓に材をとり制作を行う美術家 大洲大作氏の映像インスタレーション展を開催しました。京成電鉄上野地下線に刻まれた戦争の記憶を「車窓」の景色にたどり、それに基づく映像の投影と作品のインスタレーションを通して、上野公園や当地が日本の近代において果たした歴史的役割を考え、再検証する試みです。



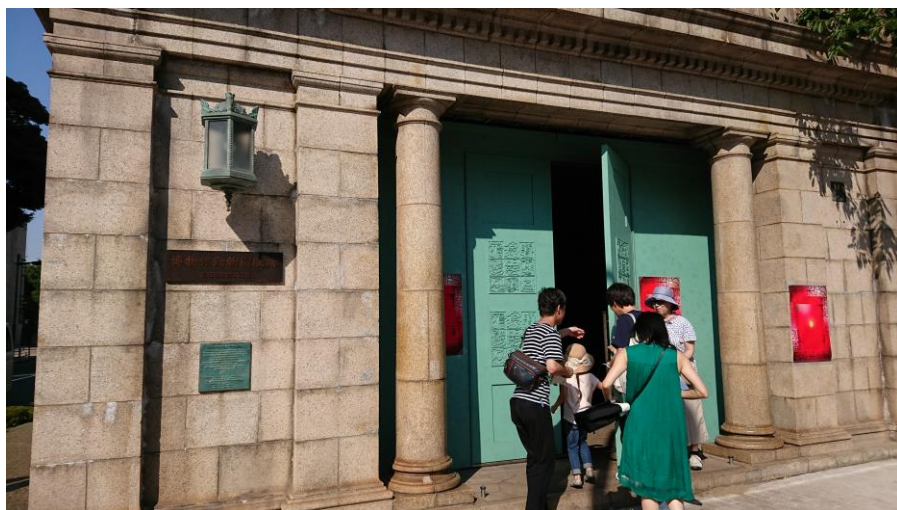
会場の京成電鉄 旧博物館動物園駅は、2018年4月「東京都選定歴史的建造物」に指定されました。

(←)

この旧駅舎が建つ一帯は、東京藝術大学や東京国立博物館と上野公園との結節点となる十字路があり、主催者含む研究者などから「アートクロス」と呼ばれています。

開催期間中は、強い日差しが照り付けるお盆期間中でしたが、多くの方にご来場頂きました。

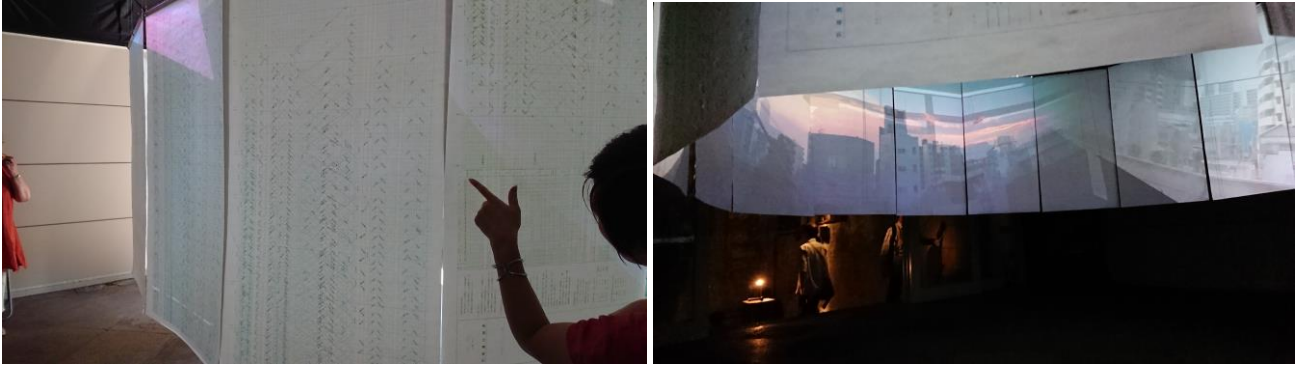
通りかかった方も普段は入ることができない旧駅舎の展示に興味深そうにいらっしやいました。(→)



扉の中に入るとすぐ、高い天井があります。東京都選定歴史的建造物に指定された風格ある建築です。

(←)

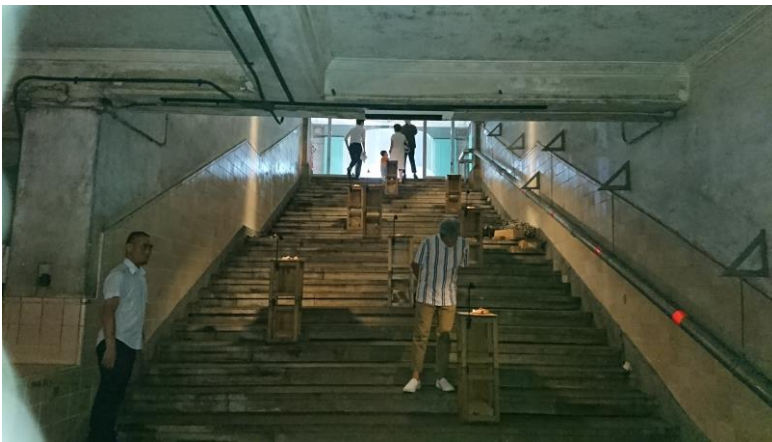
【アーティスト作品の紹介】



(↑)高い天井の下には、電車のダイヤグラムが吊るされ、その中に風景が投影された作品がありました。



地下に続く階段には、当地が戦時中、軍需工場だった際に製造されていた螺子(ネジ)などが展示されていました。(←)(↓)



満州の軍事工場に職を得ていた、作家大洲大作氏の父の回想録の言葉とともに展示される螺子(ネジ)(↑)



「今私達の工場では未だ、此んな物を製造しているけれど、此れで果して対抗し得るのだろうか？
大都市はあらかじめ焼けつくされたのである。間に合うのであろうか？此んな粗末な螺子で…」

手記の言葉からは、戦時中の過酷さがうかがわれます。

木枠で作られた旧型車両の実物の車窓を用い、車窓にうつる踏切の赤い警告灯や、当時疎開司令室に置かれた非常電話のベルの音と組み合わせたインスタレーションが展示されました。

会場は、当時の湿度や気温をそのまま体感する蒸し暑さで、戦時中の工場の過酷な環境が分かりました。

作品の解説をする大洲氏(→)



【ダンスイベントの様子】



開催期間中 8月11日(日)には、展覧会後の18時30分より、予約制で鑑賞できるダンスパフォーマンスがありました。

舞踏家 鈴木一琥氏によるダンス(←)

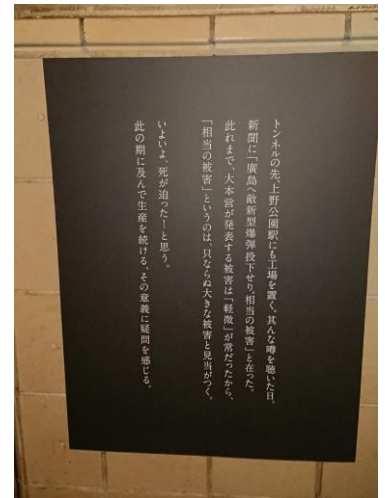
ダンス作品は多岐にわたるが、東京大空襲を題材にした代表作「3.10 10万人のことば」がある。

【トークイベントの様子】



8月12日(月・祝)にも、展覧会後トークイベントを開催しました。

本展作家の大洲大作氏と、東京藝術大学先端芸術表現科教授の小沢剛氏が登壇しました。(←)



8月10日から18日にかけてと、お盆期間中ではありましたが、連日たくさんのご来場者にお越しいただき、本企画は盛況のうちに終わることができました。ありがとうございました。